

2020年5月10日
復活節第5主日

家庭礼拝のための

聖書・牧会祈祷・メッセージ



【聖書】ルカによる福音書6章37節～38節

6

³⁷「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。³⁸ 与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。」

【牧会祈祷】

命の源である神様。

私たちは信仰を与えられ、この状況の中でも平安をいただいています。主が共にいてくださるからこそ、悲観したり諦めたりすることなく、希望を信じることができるのです。神様、この信仰を与えてくださったことを深く感謝いたします。

私たちの自粛生活は予想より長いものとなりました。この期間をなんとか乗り越えようとしてきた人たちにとって、緊急事態宣言延長は大きな落胆です。心くじけそうになっている人が多くいます。厳しい家庭環境で過ごしている子どもたちのことも心配です。どうか、全ての人を神様が慰め、守ってください。

あなたは私たちのことをどこまでも赦してくださったにも関わらず、私たちは人を裁き、人を憎むことがあります。それには正当な理由があるのだから、仕方が無いと言い訳さえすることもあります。主の愛を知りながらも、心狭く、これまでの生き方に縛られている私たちをお赦しください。愛された者としてふさわしい生き方をさせてください。

入院中の友、療養中の友が回復に向かいますように。心身の不調を感じている友がこの1週間で穏やかに過ごせますように。働く友があなたによって支えられ、その働きを通してキリストを世に証することができますように。全ての祈りを聞いてくださる神様に委ねます。

このお祈りを主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。アーメン。

今日の聖書は山上の説教（ルカによる福音書の場合、山の上ではなく平地で語られましたが）の後に続いています。山上の説教の中では、貧しい人々や悲しんでいる人々は幸いだと言われ、富んでいる人や笑っている人々は不幸だと言われています。イエス様は幸せに生きている人を否定したのではなく、キリスト者を迫害し、敵対する人たちはこういう人たちだと言ったのです。それを明らかにしたのは新しい対立を生み出すためではありません。敵対する人たちこそ愛しなさいという私たちへの厳しい願いだったのです。

イエス様は人を裁くなと言います。「裁くな」とは、具体的に言うと報復をするなという意味です。人を正しく裁けるのは神様しかおられません。けれども私たちは人の価値や罪を見極めたつもりになり、刑の執行のようにして相手への言葉や態度を決めます。それが正しく、当たり前のことだと思っています。しかし、それは自分の心が生み出したものに縛られているだけです。

自分以外の人、とりわけ自分に敵対する人に対して攻撃したり、無視したりしてしまうのはどうしてでしょうか。そうしないと、自分が傷ついてしまうからでしょう。敵対する人を受け入れてしまえば、相手の判断を認めたことになり、それは自分の価値を下げることに繋がります。これらは人の心やこの世の価値観が生み出すものです。しかし、こんなに哀しい人と人とのやりとりがあるのでしょうか。

イエス様は人を赦し、人に与える生き方をするように言いましたが、それがどんなに難しいこと

かを知っておられます。イエス様は人として生きてくださいました。愛していた弟子に裏切られ、助けた人々さえ知らぬふりをする中、十字架に向かわれたイエス様です。心が生み出すもの、この社会の価値観が生み出すものが胸を焼くことを知っておられます。それでも、イエス様が抗う手段として持ったのは愛だけでした。愛だけで、それらに打ち勝たれたのです。

「相手を裁かなければ、自分も裁かれることはない。相手を罪人だと決めなければ、自分も罪人だと決められることはない」とイエス様は言いました。これは、自分がそうすれば交換条件のように相手もそうしてくれる、ということではありません。ほんの小さなことで人を裁き、ほんの些細な許しも出し惜しみする私たちです。裁かない、と自分に抗うとき、どこまでも私を裁こうとしなかったイエス様を知ります。赦そう、と自分に抗うとき、私が思っていたよりもずっと赦し続けてくださっていたイエス様を知るのです。溢れるほどの見返りはイエス様の愛です。

イエス様が私たちに求めた生き方は全うすることなどできないものです。しかし、それでいいのです。迷い、揺れながらも愛を選び続けることが、神様と共に生きるということです。

愛するということは、心軽やかに楽しんで行えばかりではありません。また愛するのにふさわしい人だから、そうするわけではありません。なぜなら、この私こそ、イエス様が苦心し、それでも諦めずに愛してくださった存在なのですから。